

第82号

発行  
平成27年1月

# センターだより



鶴見岳に沈む夕日

## 目次

● 新年を迎えて	2
● 導電マウススティックの紹介	3
● 第34回大分国際車いすマラソン大会	4
● 第23回文化祭	5
● 蛍の答礼	5
● 大相撲尾上部屋との交流会	6
● 青山小学校体験学習	6
● 障害者週間に係る記念行事の実施	7
● 「頸髄損傷者に対するリハビリテーション研修会」の報告	7
● 終了生の状況、利用者募集のご案内	8

指定障害者支援施設

国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局

別府重度障害者センター



# 新年を迎えて

所長 小石 公二郎

明けましておめでとうございます。皆様方におかれましては、つつがなく新年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

また、センターの運営にご尽力頂きました関係者の皆様方を始め利用者の皆様など多くの方々に支えられ、新年を迎えたことに厚くお礼申し上げます。

さて、昨年を振り返ってみますと、福祉関係では大きな変化はありませんでしたが、着実に各種施策が進められたように思えます。また、我が国の出来事としては、4月から消費税が8%に引き上げられたことや毎年のことではありますが災害等が発生し、8月のデング熱の国内感染の確認、9月の御嶽山の噴火などがありました。喜ばしいことでは、2月のソチ五輪で羽生選手や葛西選手など多くの方が活躍されたこと、6月にユネスコの世界文化遺産として「富岡製糸場と絹産業遺産群」が、11月に無形文化遺産として「和紙：日本の手漉和紙技術」が登録されたこと、そして10月にノーベル賞が発表され日本人の3名の先生方が物理学の分野で受賞されたことなどが印象に残っています。

センターでは、螢の交流、盆踊り大会、文化祭、スポーツ大会などの文化・スポーツ行事を盛大に開催することができ、また、訓練成果の確認にもなり地域との交流を図る機会となる外部の行事にも参加することができました。なかでも、大分県障害者スポーツ大会、大分国際車いすマラソン大会、ボッチャのLESPOカップ、ツインバスケットボールの大分かばすカップ、ときめき作品展などに多くの利用者の方が参加して大活躍をされました。

センターの運営では、利用者サービス支援の充実を図ることを目標として、排泄管理の工夫や1週間の入浴回数の増などの改善をするとともに、利用者満足度調査等に基づく対応や支援並びに設備等の改善も行いました。また、センターのサービス支援について、客観的な評価をして頂くために「第三者評価」の受審をし、大変高い評価を頂きました。このことは、職員一人一人がチームケアの一員として主体性をもった業務姿勢を常に維持してきた成果だと思っています。さらに、国立の3施設（リハセンター、伊東センター、別府センター）の共催で、「頸隨損傷者に対するリハビリテーション研修会」を別府市において開催しました。全国の施設や病院等から多数の方に参加して頂き、リハビリ訓練の実習並びに地域移行支援に関する制度や方法などの紹介と合わせて情報交換や関係機関との連携の場とし好評を頂きましたので、国立施設としての役割を果たせたのではないかと思います。

今年は、まだ厳しい経済情勢が続いている状況もあり国の施設として施設設備や組織の充実などは難しいことから、昨年に続き、利用者サービス支援の充実に力を入れていきたいと考えております。第三者評価の結果におごること無く、自己研鑽に努め、利用者の円滑な地域移行に向けた支援として在宅生活ハンドブックの作成（3年計画の最終年）や利用者の住宅相談、家族介護者の介護体験、利用者自身で行う健康管理などの充実強化並びに利用者主体の支援に努めて参りたいと思いますので、引き続きご支援ご協力を賜りますようよろしくお願ひいたします。

# 導電マウススティックの紹介

最近はスマートフォンやタブレット端末の普及もあり、OT訓練でも専用の自助具の対応が増えてきています。今回は一例としてタッチペン（スタイルスペンと呼ばれる事もある）を応用したマウススティックをご紹介します。（写真1）

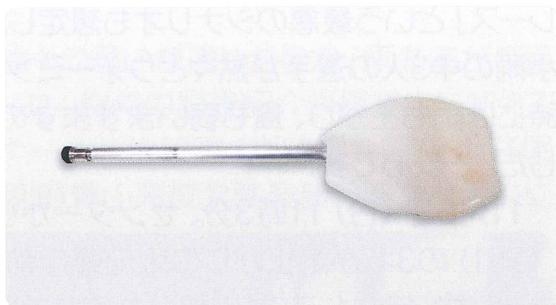
従来型の携帯電話ではマウススティックの先端に滑りづらい素材などを取り付けることでボタン操作が可能でしたが、スマートフォン等ではタッチ時に微弱な電流の感知が必要なため、一般的なマウススティックでは操作ができません。そのため、先端に導電する素材を配したタッチペンを用いる必要があります。

噛む部分においては熱可塑性プラスチックや歯科用EVA素材を用いて噛み疲れない形状を検討します。先端は市販のタッチペンを用意し、それを軸棒とつなげ完成ですが、その際に噛む部分を持ち、操作（導電）が可能であるかを確かめます。

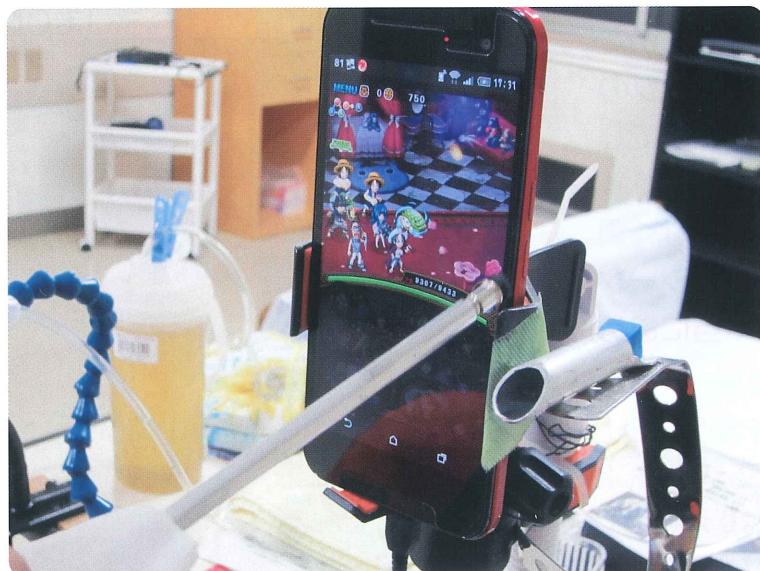
スマートフォンのタッチパネル画面が反応するには適度な電流量を必要とするため、マウススティックを咥えて、口角や唇が軸棒に触れることで感度がすぐれない製品でも活用する事ができます。

現在、これが必要とされる利用者にはこのようなマウススティックを作製し、人気のゲームアプリやメールアプリなどを活用し、家族との連絡や余暇の活用ができるような支援（訓練）を行っています。（写真2）

終了された方で、必要とされる場合は担当してもらっている作業療法士や義肢装具会社に相談をされてみてください。なお、ご不明な点などあればセンター作業療法部門までご連絡ください。



(写真1)



(写真2)

# 第34回大分国際車いすマラソン大会

運動療法士長 木畠 聰

「もう少しで止みそうだね。」前日から降り続いた雨、朝方は雨脚も強く「冷たい雨の中のレース」という最悪のシナリオも想定したところです。スタート1時間前、止みそうで止まない小雨の中3人の選手が黙々とウォーミングアップを続けます。神様はいるものです。スタート時には雨も上がり、風も弱いまずまずのコンディションの中、ハーフマラソンの号砲が鳴りました。一安心です。

11月9日(日)11時3分、センターから出場の植本さん(T52) 藤本さん(T51) 中尾さん(T51) の3名が雨上がりの大分県庁前大通りを最初の難関舞鶴橋に向けてスタートしていました。皆さんこの1年間それぞれの思いを胸に練習に取り組んできました。植本さん中尾さんは、昨年の大会でセンターから出場した選手のがんばりを目の当たりにしたことが車いすマラソンを始めたきっかけです。藤本さんは、昨年出場がかなわず2年越しのチャレンジです。日々のリハビリでの頑張りも周りの利用者も認める努力家です。

レースは、毎年多くの応援の方の声援で支えられています。きついときにも声援が選手の大きな力になります。今年は、天候の関係からか例年より少なめでしたが、センター選手の一番の頑張りどころである弁天大橋では、センター利用者やOB・OG、センター職員等多くの方が歩道につめかけ、必死の応援を送っていました。

植本さんは、予想を上回るタイム(1時間36分13秒)でゴールすることができました。藤本さんは、弁天大橋まではたどりつくことができ、次回のチャレンジに向けて貴重な経験ができました。中尾さんは、目標であった5km関門まであとわずかのところで、関門時間となり、リタイヤせざるを得ない状況でした(5kmを27分以内に通過しないとそこから先の走行が認められない)。

完走を果たすことができなかった選手もそれぞれの思いがあることでしょう。気持ちさえあれば、またチャレンジしてください。今回のレースで、7年前にセンターを終了されたT51クラスの選手で、7回目のチャレンジで初めて完走した方がいます。過去6回の関門不通過を乗り越えての快挙です。見ていた私たちは今大会のトップの選手のゴールに勝るゴールでした。あきらめない気持ちが夢を実現し、本人だけではなく周りの方の感動も誘ったシーンでした。清水さん、本当におめでとうございます。



## 第23回 文化祭

去る9月27日(土)、秋の恒例行事となっている文化祭を開催しました。今年のテーマは「No Border」、障がいのある人もそうでない人も分け隔て無く交流しようと利用者が考えたテーマのもと、開催に向け準備をしてきました。そのためには多くの人に文化祭に来て頂く必要があり、利用者有志で駅前にて文化祭のチラシ配布を行うなど広報にも力を入れました。

当日の朝は小雨模様で開催が危ぶまれましたが、我々の思いが通じたのか、雨もあがり残暑の日差しの中無事文化祭を開催することができました。例年の訓練紹介や模擬店に加えて、今年は利用者が中心となり企画したミニゲームコーナーや映像放映(訓練紹介等)、南莊園町の人と利用者とのカラオケ大会、特別企画としての別府青山高校吹奏楽部の演奏と大いに文化祭を盛り上げることができました。また、多くの人に来場して頂けたことで、頸髄損傷者の訓練や生活について地域の人たちに理解してもらう大変よい機会になったと思える文化祭でした。

最後に、各企画の関係者並びに別府溝部短期大学のボランティアの皆様、別府青山高校吹奏楽部の皆様、南莊園町自治会の皆様、本当にありがとうございました。この場をお借りして御礼申し上げます。



別府青山高校吹奏楽部の演奏

## ホタルの答礼

昨年6月12日(木)に、竹田市立南部小学校から当センターに恒例の「友情のホタル」が届きました。そして、11月19日(水)に、「ホタルの答礼」として、今度は当センター利用者3名と職員7名が南部小学校を訪問し、児童や関係者の皆さんとの交流を行いました。

「ホタルの答礼」当日は、児童や関係者の皆さんのお迎えのあと、歓迎会やボッチャゲーム等を通して親睦を図りました。歓迎会ではプレゼントの受け渡しや児童の皆さんの合唱・合奏の披露がありました。すっかり定着したボッチャゲームでは、利用者3名と職員1名がそれぞれ児童と混合チームを作つて対戦し、大いに盛り上りました。



昼食は5~6年生の教室で児童、職員、関係者の皆さんと一緒に学校給食をいただき、懐かしくも楽しい一時を過ごすことができました。

蛍の交流会も来年はいよいよ50周年の節目を迎えます。この節目を機会に、時代に合った交流会となるよう準備を進めています。時代や形は変わっても心温まる交流が未長く続いて行くことを願つてやみません。

## 大相撲尾上部屋との交流会

平成26年12月10日、当センタ一体育館に於いて、大相撲尾上部屋と利用者の皆さんとの交流会を開催しました。

尾上親方、力士・力士養成員、床山と関東後援会長、合わせて14名が来所されました。最初に、尾上親方からご挨拶と力士・力士養成員の紹介があり、その後、相撲甚句の披露、床山さんによる力士の髪結い(整え)実演、そして質問コーナー等で親睦を図りました。

最後に、記念品の交換と握手、記念撮影をして交流会を終えました。1時間ほどの間でしたが、質問コーナーでは「力士の稼ぎはどのくらい?」といった質問が出て笑いに包まれるなど、終始なごやかで楽しいひとときとなりました。



力士の皆様との交流



記念撮影

## 青山小学校体験学習

当センターでは地域活動として近隣の小学校へ訪問し福祉体験学習を実施しています。今回は、12月4日に別府市の青山小学校を訪問し、障害者への理解を深めてもらうため障害体験(車いすの操作方法、車いすで介助する・介助される体験、車いすの基本構造を知ってもらう、福祉用具の使用体験)を中心に行いました。

車いす体験では、普段乗る機会がない車いす体験と介助を行いました。はじめのうちは慣れずにうまくこげませんでしたが、慣れてくると方向転換やこぎしろが長くなるなど、上手に操作できるようになってきました。

介助体験では、介助される側の恐怖感を取り除くためにはどういった声掛けで安心してもらえるか、どのように介助すれば段差などを超えられるかなど、実技をしながら体験してもらいました。

また、指が動かない場合でも書字具やソックスエイドなどの自助具を使用して機能を補いながら、書字や靴下を履き、可能な限り自分の事を自分で行うことの重要性を児童の皆さんに学んでいただきました。

今後も障害者への理解を広められるようこのような福祉体験学習を継続していくければと思います。



## 障害者週間に係る記念事業の実施



障害者週間に係る記念事業として、12月11日(木)に小城 左貴さんを講師に招き「センター終了後の自立生活」をテーマとした講演会を開催しました。

小城さんは、平成18年に当センターを終了し、現在は、福岡市で一人暮らしをしながら、企業に就職し働いています。

講演では、住宅をリフォームした際に工夫した点や社会人としての服装についての工夫などをスライドを用いて紹介していただいた他、職場での苦労している点やその解決方法などのお話や、「自立生活とは身の回りを全部自分でこなすことではない。一人で生きていくことは、健常者でもできない。人に頼るところは頼る。ただし、何事も自己責任が伴う。だからこそ、自立生活は楽しい。」、「仕事をしながら一人暮らしは大変。ヘルパーにしっかり手伝ってもらい自分の生活を組み立てることが大事。」など、利用者にとってとても参考となる内容で大変有意義な講演となりました。

また、講演終了後にも、自立を考えている利用者からの相談に乗っていただき、ありがとうございました。

講師として来所していただいた、小城さんのますますのご活躍をお祈り申し上げします。

## 「頸髄損傷者に対するリハビリテーション研修会」の報告

医療機関並びに福祉施設等の関係者を対象に、平成26年10月25(土)、10月26日(日)の2日間にわたり「頸髄損傷者に対するリハビリテーション研修会」を開催しました。

初日は、労働者健康福祉機構総合せき損センターの植田 尊善 副院長による「脊椎脊髄損傷者の臨床—急性期治療から車椅子スポーツ、社会復帰までの実際—」についての基調講演と、国立障害者リハビリテーションセンター、伊東重度障害者センター及び別府重度障害者センターで実施してきた頸髄損傷の方々に対するリハビリ継続と地域移行、支援の実際、事例報告を行いました。

2日目は、理学療法、作業療法、スポーツ訓練、ケース支援と職能訓練に分かれ各実技研修や事例研究を行いました。

なお、参加者の状況は、次のとおりです。

### ●1日目職種別の参加者状況

職種別	人数
理学療法士	56
作業療法士	38
運動療法士	1
医 師	5
看 護 師	11
介 護 員	3
MSW・CW	12
一般障害者	1
そ の 他	4
合 計	131

### ●2日目職種別の参加状況

職種別	実技I	実技II	相談等	計
理学療法士	36	6		42
作業療法士	23	4		27
医 師			1	1
看 護 師			3	3
MSW・CW	1	6		7
計	60	16	4	80

※実技I(PT、OT、スポーツ実技) ※実技II(生活支援、職能実技)

## 終了生の状況

(平成26年7月1日～平成26年12月31日)

復帰形態	家庭復帰	就職	自営・内職	現職復帰	就労支援施設・能開校	他施設	病院	進学	その他	計
人 数	4	1	0	1	0	3	0	0	0	9
比率(%)	44.5	11.1	0	11.1	0	33.3	0	0	0	100.0

## 利用者募集のご案内

当センターは、厚生労働省が設置・運営する指定障害者支援施設です。主に頸髄損傷等による重度の肢体不自由の方で、市区町村から「障害福祉サービス受給者証」の交付を受けた方を対象に、社会復帰に向けた支援を行っています。

ご利用できるサービスは以下の通りです。

### ○自立訓練（機能訓練）

理学療法、作業療法、スポーツ訓練、職能訓練です。

利用期間については、利用開始後の評価に基づき作成した個別支援計画書に定めた期間となります。障害者総合支援法上の標準利用期間は1年6か月間です。（頸髄損傷による四肢の麻痺その他これに類する状態にある方は最大3年間です。）

### ○施設入所支援

自立訓練（機能訓練）を利用される方で、自宅から通所が困難な方のために、看護・介護等の支援を受けながら宿舎の利用が可能です。

詳細は、次のURLから当センターのホームページをご参照下さい。

<http://www.rehab.go.jp/beppu/>

なお、当センターの概要や利用申込み手続き、見学などのお問い合わせについては、下記までご相談ください。

### お問い合わせ先

国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局

## 別府重度障害者センター 支援課

住 所 〒874-0904 大分県別府市南莊園町2組

電 話 0977-21-0182 (利用相談)

F A X 0977-21-2794

E-mail soudan-beppu@rehab.go.jp